

### 3 認知症の人の社会参加の機会の確保等

- (1) 認知症の人自らの経験等の共有機会の確保
- (2) 認知症の人の社会参加の機会の確保
- (3) 多様な主体の連携・協働の推進による若年性認知症の人等の就労に関する事業主に対する啓発・普及等

#### 【施策の目標】

認知症の人が孤立することなく、必要な社会的支援につながるとともに、多様な社会参加の機会を確保することによって、生きがいや希望を持って暮らすことができるようにすること

#### 【目指すべき姿】

県民一人ひとりが、認知症になっても生きがいや希望を持ち、個性と能力を十分に発揮できる。

#### (1) 認知症の人自らの経験等の共有機会の確保

##### (現状と課題)

- 認知症の人や家族等が、診断後早い段階で他の認知症の人やその家族に出会い、その経験に触れられるよう、ピアサポーターによる相談を推進することも重要です。
- ピアサポート活動による本人発信を実施するため、市町と連携して支援体制を構築していく必要があります。
- 認知症になっても支えられる側だけではなく、支える側として役割と生きがいを持って生活ができる環境を整備するため、認知症地域支援推進員等が中心となって地域資源をつなぎ、地域支援体制を構築していく必要があります。

##### (県の取組)

- 今後の生活の見通しなどに不安を抱えている認知症の人や家族に対して、精神的な負担の軽減と社会参加の促進を図るため、認知症の人同士、家族同

士による相談支援である、ピアサポート活動を開催し、認知症の人や家族による発信の支援を推進します。

また、住み慣れた地域で仲間等とつながりあえるピアサポート活動が、市町において開催されるよう支援します。(再掲)

- 各市町の認知症地域支援推進員の育成支援を実施し、各市町における適切な配置を推進します。
- 若年性認知症の人を含めた認知症の人が、地域社会を支える担い手として活躍できるよう、就労支援も含めて個別の相談・支援を実施していることを明示した認知症地域支援推進員や若年性認知症支援コーディネーターが市町において設置されるよう、就労支援はじめ必要な支援対応力の向上に資する研修会等を開催します。

## (2) 認知症の人の社会参加の機会の確保

### (現状と課題)

---

- 住み慣れた地域で認知症の人の社会参加の機会の確保が進むよう、本人ミーティングや認知症希望大使など認知症の人の声が発信される機会の創出を促進する必要があります。
- 市町の職員が、本人ミーティングに参画して、認知症の本人や家族等の意見を踏まえて、地域づくりや認知症施策に反映することが重要です。
- 社会参加を契機として、引きこもりがちな認知症の人やその家族へのピアサポート活動等を推進する必要があります。
- 市町の認知症地域支援推進員が、本人ミーティング等の開催に向けて、企画調整や相談・支援体制づくりを行い、地域の関係者と連携し、市町において社会参加の機会の確保が図られることが重要です。
- 高齢者のボランティア活動は社会参加の有効な手段であり、知識、特技・技能を活かし、役割を持った形での活動を促進する必要があります。

## (県の取組)

---

- 介護サービス事業所等において、認知症の人をはじめとする利用者が謝礼等を受け取ることもできる社会参加や社会貢献の活動を行う取組を支援します。
- 県内における取組を情報収集して、介護事業所や企業等にメールマガジン等を通じて事例を紹介し、取りくみやすい体制整備を推進します。
- 市町の認知症地域支援推進員が、本人ミーティング等の開催に向けて、企画調整や相談・支援体制づくりを行うことができるよう支援します。
- ピアサポート活動や本人ミーティング等に市町職員が参加し、認知症の本人や家族等の意見を踏まえて、市町が部署横断的に取組を検討し、認知症施策に反映できるよう研修会等を開催します。
- 市町において、認知症の人と家族等が参画して地域の実情や特性を生かした取組を認知症施策の計画として策定し、その計画に達成すべき目標およびKPIを設定できるよう、研修会等を開催します。

### (3) 多様な主体の連携・協働の推進による若年性認知症の人等の就労に関する事業主に対する啓発・普及等

## (現状と課題)

---

- 他者と交流できる社会参加の場では、その場に単身で通うことが難しい方への支援や、若年性認知症の人でも利用できる場をつくることなども課題となっています。
- 若年性認知症は働き盛り世代、子育て世代で発症するため、就労の継続、経済的な問題、配偶者と親など複数の人を同時に介護する多重介護になった場合の対応のほか、若年性認知症の人のニーズに合ったケアを提供する社会資源が少ないことなど、高齢期に発症する認知症とは異なり、多分野にわたる課題が存在します。
- 若年性認知症の人は認知症のある高齢者に比べて数が少ないことから、市

町の担当者も支援にあたる機会が少なく、支援のノウハウを蓄積することが難しい状況にあります。

- 県では、平成 22（2010）年に全国に先駆けて総合支援窓口として「若年性認知症支援コーディネーター」の配置を行い、若年性認知症の人と家族等の支援を市町や地域包括支援センター、企業等と連携して行っています。
- 自立支援ネットワーク会議、若年性認知症意見交換会や、行政担当者を対象とした研修、介護事業所を対象に若年性認知症のケアの質の向上を図るための研修会の開催など、様々な取組を実施しています。
- 平成 29（2017）年に若年性認知症本人の会「レイの会」が設置され、北中勢地域を中心に本人の集い、本人ミーティングを行っています。また、若年性認知症の人がチームオレンジの活動に参加し、認知症サポーターと共に社会参加活動を行っています。
- 支援ニーズや必要性が表面化しにくい家族介護者を早期に発見し、抱える負担や複雑化した課題への対応を行うためには、地域包括支援センターのみならず、市町で実施している家族介護支援事業、認知症カフェの活動、ケアマネジャーによる仕事と介護の両立支援などの取組み等、関係機関や団体、多分野との連携を図ることが重要です。

#### **（県の取組）**

---

- 地域包括ケアシステムアドバイザー派遣事業により専門職等を派遣する等して、市町による地域ケア会議の開催や認知症になっても参加し続けられる「通いの場」づくりを支援していきます。
- 産業医や企業の団体を通じて、「若年性認知症における治療と仕事の両立に関する手引き」（令和 3（2021）年 12 月作成）の普及啓発を行い、医療機関への早期の受診勧奨の啓発を行うとともに、若年性認知症の人の意欲と能力に応じた雇用継続に向けて取り組みます。
- 企業を対象とした、障がい者雇用に関するセミナーやメールマガジン等を通じて、若年性認知症に関する情報を周知啓発します。

- 若年性認知症の人と家族への支援の充実を図るため、若年性認知症支援コーディネーターを引き続き配置し、相談、就労に関する支援、ネットワークづくりや、若年性認知症に関する普及啓発を行います。
- 介護事業所や地域包括支援センター等を対象に若年性認知症のケアの質の向上を図るための研修や、企業の人事担当者を対象に若年性認知症についての知識を深めるための研修を行います。また、市町の相談窓口において若年性認知症の人のニーズや困りごとへの適切な相談支援が充実するように、障がい福祉、高齢福祉の行政担当者を対象に活用できる制度の理解、支援対応力の向上を図る研修を行います。
- 若年性認知症支援コーディネーターを中心に、医療関係者、介護関係者、経済団体、認知症の人の家族等の関係者が協議する場である「若年性認知症自立支援ネットワーク会議」の開催を通じて、若年性認知症の人と家族に対して、診断直後から就労中、退職後といったそれぞれの状況における切れ目のない支援体制づくりに取り組みます。
- 市町において、若年性認知症の人のつどいや本人ミーティング、ピアサポート活動、本人の声の発信の機会の確保等に取り組めるよう、研修会等を開催します。
- 介護サービス事業所等において、認知症の人をはじめとする利用者が謝礼等を受け取ることもできる社会参加や社会貢献の活動を行う取組を支援します。(再掲)
- 認知症の人が、企業や地域の関係団体等の協力のもと、社会活動に参画する機会の確保を通じてその個性と能力を十分に発揮することを支援します。
- 若年性認知症の人や家族等のニーズ、若年性認知症の人が生活する地域の資源に応じた支援を行うため、若年性認知症支援コーディネーターが認知症地域支援推進員や地域包括支援センターの職員に対して支援を行うこと、認知症地域支援推進員が若年性認知症支援コーディネーターに対して地域のピアサポート活動の情報等を紹介すること、若年性認知症支援コーディネーター等と企業の産業医や両立支援コーディネーター等による連携した対応を行うことなどを推進します。

## 【 コラム 】

### 認知症の人が行う洗車活動

鈴鹿市にある運送会社では、若年性認知症の人も含め認知症の人が月1回の洗車活動に取り組んでいます。活動には10名前後が参加し、4台程度の車の洗車を行い、3,000円の謝金を受け取っています。

この取り組みのきっかけは、社長のご家族が認知症となり、社長自身が認知症サポーター養成講座を受講し、「認知症を知ることで介護が楽になった」と感じた経験から、社員も将来同じような状況に直面する可能性があると考え、柔軟に働ける環境づくりを進めるためにも、この経験を社内で共有することで、従業員が認知症の理解を深め、社会貢献への意識を高める重要な機会にしたいとの思いが生まれました。

そこで、鈴鹿市社会福祉協議会で洗車活動を行っていた「若年性認知症本人の会レイの会」に声をかけ、実施へとつながりました。従業員もこの活動の実施に関わることで認知症に関する理解を深め、将来的に従業員自身やその家族にとっても有益であり、多様な人々への理解促進にもつながることを期待しているといったお話しを社長よりお聞きしています。

一方、参加している認知症のご本人からは、「お金をいただいているので、車をきれいにしたいし、体も動かせる。施設利用中に外へ出て仕事ができ、施設でこもっているより気が晴れる。いろいろな体験をすることは良いことだと思うし、役にも立っていると思うので、活動が広がっていくと良いと皆で話している」との声が聞かれています。



若年性認知症支援コーディネーターが、企業とつなぐ役割を担っています。